



デルフト壺のばら 油彩

小山敬三の

あくまでも気高く

ばらの絵展

Keizo Koyama's Roses

2020 4.11-11.4

小諸市立小山敬三美術館

Koyama Keizo Museum of Art

小諸市丁221 (懐古園内)

☎ 0267 (22) 3428

9:00~17:00 期間中無休

主催 小諸市教育委員会 小諸市立小山敬三美術館

後援 信濃毎日新聞社 小諸新聞社 東信ジャーナル社 コミュニティテレビこもろ (公財) 八十二文化財団

小山敬三（1897－1987）は花の絵を多く描いていますが、中でもばらを特に好んで描いています。ばらの一番の特徴は気品があることだという小山のばらは、城や山など他のモチーフと同様、堅牢な構成と落ち着いた色彩で描かれていて、くずれたところがありません。小山は見る人の官能をかきたてることをねらってばらの絵を描いたのではなく、花との対話で得られた感動が、絵を見る人に静かに、しっかりと伝わるように技術と経験を駆使して描いています。

小山のばらの絵は晩年に多く描かれていますが、本展では比較的初期のものと思われる作品も特別展示しています。作者のばらに対峙する気持の変化が感じられるように思います。小山はばらをお気に入りの壺に生けて描いています。また、背景には様々な色合いの調度品や柄布が配置され、花の色彩と精緻な均衡を保っています。絵に登場する壺や調度のいくつかは当館に隣接する小山敬三記念館でご覧いただくことができます。

気品がありながら冷たい印象を与えない小山敬三のばらの世界をゆっくりとお楽しみください。



ばら 水彩



ばらを描く小山敬三画伯



ばら 油彩



ばら 油彩



ばら インク・水彩



ばら 日本画



ばら インク・水彩



ばら 日本画

薔薇の絵に対する小山敬三の考え方

薔薇を描くのもその他のことと同じでね。友達は「素晴らしい薔薇だ」って誉めてくれたけど。薔薇の満開は見事で、それもいいけれど、蕾からだんだん、三分、五分、七分咲きと開いて行く時に、非常に造形的にも美しいことがあるんですよ。それを描こうとするとね、骨がおれるんだよ。生けてる時、「この形も色もいいなあ」と思っているうちに、どんどん開いちゃうんだ。だから、飯もおちおち食べられない。村野先生のようになっちゃう（注）。

うまく掴めないから、夕食もそこそこに夜遅くまでやることになるんだ。神経衰弱になっちゃういそうだから、薔薇は一時とおざかったりしたことありますけどね。薔薇で一番大事なことは、気品があるっていうことではないでしょうか。薔薇が俗なものになっちゃったら、意味が無いと思うんです。薔薇はいい薫りもあるし、色彩も上品だし、形もうつくしいし、何よりも気品があるんだよ。それを掴まなくちゃ嘘だと思うんだね。

（注）小山敬三美術館の設計者村野藤吾氏（芸術院会員、文化勲章受章）が、施工にあたって飲食もかまわずに現場で指示を出しているのをさす

「小山敬三画業60年展」（1974年 於いて日本橋三越）開催にあたっての月刊VISION 1975年10月号特集号のインタビュー記事から抜粋